

第 105 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

The Hoped Horizon of Psychiatry

コーディネーター 松本 良平, 齋藤 利和

精神医学において、生物学的・心理学的・社会的側面から統合的理解を進めることの重要性はよく指摘される場所である。本シンポジウムでは、世界各国から集まった、異なる文化や社会状況に属する若手精神科医から、生物学的・心理学的・社会学的精神医学に対する理解と今後の発展に向けての提言がなされた。

3名のシンポジストは、近年の neuroimaging や genetics といった生物学的精神医学の知見を紹介しつつ、バランス良く生物学的・心理学的・社会学的精神医学の吟味を行われた。

Dr. Nejatifa (Iran) は futurology の概念を紐解きつつ、Ghaemi, S.N. の著作である「The Concepts of Psychiatry (The Johns Hopkins University Press, 2003)」にまで言及して、精神医学の方向性を議論された。中前先生 (京都府立医科大学) も奇しくも同じ書籍を引用しつつ、精神医学における概念の変遷を概説するとともに、今後はよりきめ細かい精神医学の深化が必要であると論じられた。Dr. Gupta は stigma についても言及されていたため、総合討論でも stigma はいかにして発生するのか、どのようにすれば解消していけるのかについて、演者・座長・フロアから様々な意見が出された。本シンポジウム参加者全員に、精神疾患に対する stigma は依然として我々が取り組んでいくべき課題として存在することが改めて認識されたと思われる。

なお本シンポジウムは日本精神神経学会国際委員会の海外若手招聘企画の一環として行われた。当初は、海外から3名・国内から1名の演者に御講演頂く予定であったが、会期の変更に伴い、海外から2名・国内から1名と変更になった。当日は、本シンポジウム以外に招聘されている海外からの若手精神科医も議論に参加し活発な議論がなされた。また、各国の医療制度にも話題が及んだが、日本の医療保険は政府が運営していることと、医療へのアクセスの良さに驚かれていた。一方で、現状では医療行為に対する査定が不十分であること・医師不足であること、といった日本の問題点も紹介された。

本シンポジウムでは、様々な文化的背景に依存する精神医学および精神科医療における普遍性と特殊性についての議論・相互理解を深めることも目指してはいたが、残念ながらそこまで踏み込んだ議論には至らなかった。その要因にシンポジストが3名 (当初は4名を予定も、総会延期に伴い1名が参加できなかった) という事情もあったかと思われる。しかしながら、活発な議論からも、精神医学および精神科医療が目指すべき地点が参加者に想起されたはずであり、本シンポジウムは成功であったと思われる。アジアにおける多様な background を有する精神科医がお互いを刺激し合えるような場を設けて頂いたことに感謝したい。

シンポジウム The Hoped Horizon of Psychiatry 座長: Ryohei Matsumoto (Sobu Hospital, Japan Young Psychiatrists Organization: JYPO), Toshikazu Saito (Department of Neuropsychiatry, School of Medicine, Sapporo Medical University) コーディネーター: Ryohei Matsumoto (Sobu Hospital, Japan Young Psychiatrists Organization: JYPO), Toshikazu Saito (Department of Neuropsychiatry, School of Medicine, Sapporo Medical University)